

12年間を終えるにあたって

人間環境デザイン学科 川内美彦

私はこの学科の発足時から関わってきっていたが、新学科だとはじめは学生数が少ないので常勤教員数も少なくすべきであるとの大学側の意向により、最初の2年間は非常勤として、第1期生から必修科目であるユニバーサル・デザイン概論を受け持ってきた。

以前から講演等で多くの人前で話すことには慣れていたので、特にあがるということにはなかったが、逆にそうだからか、目の前の学生の間によどんだ空気が満ちていることはすぐにわかった。

みんな1期生で入学したてだから、最初はある種の緊張感があった。しかし数週も経つとそんなものはなくなり、遅刻や居眠り、飲食が目立ってきた。学科は最初からユニバーサル・デザインを前面に出していたから、それを目的に来た学生が中心だと思っていたが、目の前には偏差値で輪切りにされ、入って何をやるかよりも自分の成績で入れる大学ということで入ってきた、いやそれ以前に、何のために大学に行くのかを考えずに来たのではないかと思われる学生が大量にいた。あとでわかってきたが、もちろん何らかの志を持って来ていた学生もいたが、それは当時の私には見えなかった。

私は大学生に過大な思い込みをしていたのかもしれない。目の前の学生の現実は、私の期待値とは大きく隔たったものだった。

さらに私を驚かせたのは、学生の「評価」に対する執着である。グループワークで積極的にやらない人と、積極的にやった自分が同じ評価を受けるのはおかしいと言ってくる学生の存在である。あるいは授業は聞かなくてもテストでは点を取りたいという学生の存在である。授業で発言を促しても大抵は無言である学生が、個別にはいろいろな気持ちを教員に対してぶつけてくる。彼らは大学に来るまで、勉強とは教員の評価を得るためにやっているのだという訓練を受けてきたのだと思う。そして評価とは自分の力がついたかどうかではなく、他者との関係性の中で比較されるものだという経験を繰り返し重ねてきているのだろう。

個別にだと自己を出してくる学生が、授業のような場だと口を閉ざすことにも戸惑った。まるで自分の存在をできるだけ消そうとしているような印象であった。人が自分をどう思うかについて、過度なほど神経をとがらせているようだ。周りに悪く思われないように、当たり障りのない態度でその場を繕われては、そもそも議論が成り立たない。

ともかくこうして私の大学教員のキャリアは始まった。時間の経過と共に学生たちの置かれている状況、考え方が少しずつわかるようになると、半分大人で半分子どもである彼らと接することにだんだんと面白さも感じるようになってきた。

一人、忘れられない学生がいる。親の経済的都合で学業を継続できなくなった。それまでは顔見知り程度の関係しかなかったその学生は、最後の日、「必ず戻ってきます」と私に悔しそうな顔を見せた。それ以降、彼とは会っていない。いまどうしているのだろうか。復学したという話は聞こえてきていないから、社会に出て働いているのだろうか。

彼のように親の都合で学業を続けたくても続けられなくなる学生がいる。一方で、学習意欲の見え

ないまま大学で時間を費やしている学生もいる。

私は彼らの人生の大学生時代という区切りの中で、彼らと接触してきた。短い接触のあと彼らは社会に出ていき、多くはもう連絡さえしてこない。この限られた時間の中で、私は彼らに何を伝えることができたのだろうか。その問いかけに積極的に答えられる自信はない。

各教員が授業の中で伝えることをすべて身に付けていたら、学生はものすごい情報を吸収することになる。しかし大抵のことは忘れ去ってしまい、それは私とて同じことだから、それについて非難がましいことを言える資格は私にはないし、そうするつもりもない。しかし自分に引き寄せて考えると、教員一人ひとりがどのような人柄であったりとか、日常の何げないひと言だったりとか、そういったことは不思議と覚えている。

私たちは毎日食事をして生命を維持しているが、何月何日に食べたものが身体のどの部分に影響しているかはわからない。すべての食事が身体全体に薄く影響する。その積み重ねで毎日ではできている。教育とは、学ぶとは、そういうものかもしれない。どこだとは特定できないどこかに影響して、学生一人ひとりの考え方や行動を作り上げていく、そこに私はどのような貢献ができたのであろうか。

忸怩たる思いと共に、私は大学を去る。

